

沈黙の中から浮かび上がってくるものとは



セシル・アンドリュ 「DÉ-CONSTRUCTION」

10月1日→11月19日
Gallery HAM (名古屋市中種区) ②6



《VIE OU MORT 浮かび・沈み》
Dictionaries of various languages, PVC atelier

フランス出身の作家、セシル・アンドリュ（1956—）は、荒川修作の作品との出会いから日本文化に興味を持ち、1982年に来日。東京大学で日本語や美学などを学び、パリ第一大学の博士論文では人と空間と言語の関係を考察。その後、言葉への関心が高まり、現在は金沢を拠点にその探求を続けている。今回の個展のタイトルは、哲学用語の脱構築を意味する言

葉である。

「4組のインスタレーションで構成します。形式や材料は異なりますが、内容は一貫したものです。この中に、国語辞典をシュレッターを使って遺物にして素材にした作品があります。そうした意味での言葉のデコンストラクションを提示したいと考えています」

国語辞典の断片からつ

くられた石のような《PIERRES DE SILENCE 沈黙の石》。様々な言葉の断片が詰められた輪状の《VIE OU MORT 浮かび・沈み》。ダ・ヴィンチの「ウイトロウィウスの人体図」の幾何学的構図から着想した線状の《Omniscience》。そして、文字や数字が融け合った盤状の《SURGERIE 812266・179744》。これらの作品から共通して感じられるものは、沈黙と時間の積層である。



《PIERRES DE SILENCE 沈黙の石》
Gallery Deleuze-Rochetin, Arpaillargues, France

「明確にある制作の動機を強く伝えるのではなく、作品は人に想像させるものでありたい。そして、制作の過程も大切に考えているので、時間を感じさせることも意識しています」

セシルが扱う言葉の認識の問題は、作品の表面だけを見ても理解できるものではない。展示空間の中で作品の内まで目を向けた時、浮かび上がってくるものがきつとあるはずだ。